

地元産広葉樹用材の流通と価格 (I)

奈良・和歌山県について

大北 英太郎*・中山 哲之助*

The Market Structure and Pricing Process of Saw Timber of Locally Produced Broad Leaved Trees (I) In Nara and Wakayama Prefectures

Eitaro OHKITA,* and Testunosuke NAKAYAMA*

Summary

We conducted a survey of the saw timber of broad leaved trees produced in Nara and Wakayama prefectures to make their market structure and prices clear. The followings are the findings from this survey.

1) There are quite many tree species and qualities of saw timber of broad leaved trees, and their uses are also very diversified.

2) As a result, their market structure and pricing process are complicated and diversified too.

3) The demand for each kind of saw timber of broad leaved trees is not so large, and imported saw timber of broad leaved trees are substitutive or complementary to home-produced broad leaved trees in their many uses. Except Keyaki (*Zelkova serrata* MAKINO) the saw timber of broad leaved trees usually have a scarcity value as much as that of needle leaved trees has. Keyaki (*Z. serrata* MAKINO) has a very high scarcity value, and its price is the highest among all species of broad leaved trees.

I はじめに

針葉樹用材の流通と価格については、これまで種々の調査研究がなされ、その実態は比較的明らかにされている。しかし、広葉樹用材のそれについてはその実態はそれ程明らかにされていない。このため我々は昭和57年度より2ヶ年間文部省科学研究費補助金(総合研究A)を受けて広葉樹用材の流通に関する調査をおこなっているが、本報告は、その一部の奈良・和歌山両県についての調査を取りまとめたものである。

この調査にさいし御協力を頂いた行政機関・業界など関係者の方々に厚く謝意を表する。

*鳥取大学農学部林学科林業経済学研究室; Laboratory of Forest Economics, Department of Forestry, Faculty of Agriculture, Tottori University.

II 広葉樹林の現況

1. 広葉樹資源の現況

奈良・和歌山両県における広葉樹資源の現況は第1, 2表のとおりである。

すなわち, 第1表にみるように両県とも広葉樹林はそれぞれ10万ha以上の面積, 1,000万 m^3 以上の蓄積を有するが, 「人」「天」別にはその殆んどが天然林であり, 国有・民有別にはその大部分が民有林である。

しかし, 用材としての資源量をみるため, 第2表の61年生以上をみると和歌山県は国有林が民有林

第1表 広葉樹資源の現況

単位(面積: ha, 蓄積: 1,000 m^3)

県 別	奈 良 県						和 歌 山 県					
	国 有 林		民 有 林		計		国 有 林		民 有 林		計	
	面積	蓄積	面積	蓄積	面積	蓄積	面積	蓄積	面積	蓄積	面積	蓄積
人 工	180	6	3,223	157	3,403	163	412	13	1,512	106	1,924	119
天 然 林	6,106	821	90,569	9,234	96,675	10,055	4,757	472	116,137	10,222	120,894	10,694
(A) 計	6,286	827	93,792	9,391	100,078	10,218	5,169	485	117,649	10,328	122,818	10,813
(B) 立 木 地	12,911	1,292	271,834	39,777	284,745	41,069	18,891	1,687	344,100	39,708	362,991	41,395
(A)/(B)×100%	48.7	64.0	34.5	23.6	35.2	24.9	27.4	28.8	34.2	26.0	33.8	26.1
ha 当り 蓄積		132		100		102		94		88		88

注 1980年世界農林業センサス林業調査報告書による。

第2表 広葉樹面積の齡級構成

(単位: ha)

縣	林 種	齡 級	計				
			計	～ 20 年生	21～40年生	41～60年生	61年生以上
奈 良 県	人 工 林	総 数	3,384(100)	2,243(66)	1,107(33)	11(0)	23(1)
		くぬぎ・なら	3,128(100)	2,157(69)	967(31)	—	4(0)
		ぶ な	—	—	—	—	—
		そ の 他 広	256(100)	86(34)	140(55)	11(4)	19(7)
	天 然 林	総 数	96,307(100)	24,638(26)	26,888(28)	17,524(18)	27,257(28)
		くぬぎ・なら	737(100)	557(76)	22(3)	—	158(21)
		ぶ な	1,259(100)	—	3(0)	—	1,256(100)
		そ の 他 広	94,311(100)	24,081(26)	26,863(28)	17,524(19)	25,843(27)
	国 有 林	総 数	161(100)	43(27)	108(67)	6(4)	4(2)
		くぬぎ・なら	—	—	—	—	—
		ぶ な	—	—	—	—	—
		そ の 他 広	161(100)	43(27)	108(67)	6(4)	4(2)
民 有 林	総 数	5,738(100)	606(10)	184(3)	44(1)	4,904(86)	
	くぬぎ・なら	143(100)	—	—	—	143(100)	
	ぶ な	1,259(100)	—	3(0)	—	1,256(100)	
	そ の 他 広	4,336(100)	606(14)	181(4)	44(1)	3,505(81)	
民 有 林	総 数	3,223(100)	2,200(68)	999(31)	5(0)	19(1)	
	くぬぎ・なら	3,128(100)	2,157(69)	967(31)	—	4(0)	
	ぶ な	—	—	—	—	—	
	そ の 他 広	95(100)	43(45)	32(34)	5(5)	15(16)	

齢 級			計	～ 20 年生	21～40年生	41～60年生	61年生以上
奈良県	民有林	総 数	90,569(100)	24,032(26)	26,704(30)	17,480(19)	22,353(25)
		くぬぎ・ならぶな	594(100)	557(94)	22(4)	—	15(2)
		その他広	—	—	—	—	—
		天然林	89,975(100)	23,475(26)	26,682(30)	17,480(19)	22,338(25)
和歌山県	計	総 数	1,915(100)	833(43)	955(50)	114(6)	13(1)
		くぬぎ・ならぶな	262(100)	130(50)	113(43)	19(7)	—
		その他広	—	—	—	—	—
		人工林	1,653(100)	703(42)	842(51)	95(6)	13(1)
	天然林	総 数	120,567(100)	48,690(40)	59,162(49)	9,411(8)	3,304(3)
		くぬぎ・ならぶな	22(100)	1(5)	2(9)	16(73)	3(13)
		その他広	106(100)	—	1(1)	19(18)	86(81)
		天然林	120,439(100)	48,689(40)	59,159(49)	9,376(8)	3,215(3)
	国有林	総 数	403(100)	40(10)	284(70)	71(18)	8(2)
		くぬぎ・ならぶな	—	—	—	—	—
		その他広	—	—	—	—	—
		人工林	403(100)	40(10)	284(70)	71(18)	8(2)
天然林	総 数	4,431(100)	1,027(23)	751(17)	740(17)	1,913(43)	
	くぬぎ・ならぶな	20(100)	—	1(5)	16(80)	3(15)	
	その他広	106(100)	—	1(1)	19(18)	86(81)	
	天然林	4,305(100)	1,027(24)	749(17)	705(17)	1,824(42)	
民有林	総 数	1,512(100)	793(53)	671(44)	43(3)	5(0)	
	くぬぎ・ならぶな	262(100)	130(50)	113(43)	19(7)	—	
	その他広	—	—	—	—	—	
	人工林	1,250(100)	663(53)	558(45)	24(2)	5(0)	
天然林	総 数	116,136(100)	47,663(41)	58,411(50)	8,671(8)	1,391(1)	
	くぬぎ・ならぶな	2(100)	1(50)	1(50)	—	—	
	その他広	—	—	—	—	—	
	天然林	116,134(100)	47,662(41)	58,410(50)	8,671(8)	1,391(1)	

注 (1) 1980年世界農林業センサス林業調査報告書による。

(2) ()内は比率

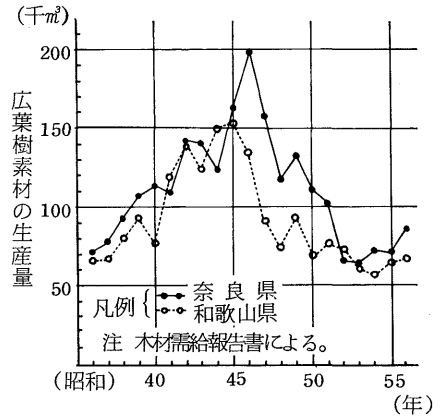
より面積が多く、奈良県は国有林が民有林の $\frac{1}{4}$ 程の面積となっている(第1表と第2表の数値は、第1表には伐跡地等が含まれるためか一致しない)。次に広葉樹天然林の齢級構成を比率でみると、61年生以上のしめる面積比は和歌山県は国有林が43%、民有林が1%、奈良県は国有林86%、民有林25%で両県とも国有林が圧倒的に比率が高い。

2. 広葉樹素材の年次別生産量の推移

木材需給報告書¹⁾によると、広葉樹素材の年次別生産量は、第1図のとおりである。

奈良・和歌山両県とも年による変動が大きい、奈良県は昭和46年、和歌山県は昭和45年に最大値を示し、それまでは増加傾向、以後減少に転じている。ただ両県とも昭和54年から増大傾向にあるが、これは広葉樹資源の状況からみれば一時的現象であろう。数量的には昭和56年で奈良県85千

m^3 、和歌山県 $66 \text{千} m^3$ であり、これはそれぞれの最大生産量の年の 42, 43% である。両県合計の素材生産量のうち $131 \text{千} m^3$ (87%) は民有林で、 $20 \text{千} m^3$ (13%) は国有林である。この広葉樹の素材生産量を木材需給報告書¹⁾によって「ナラ」、「ブナ」「その他広葉樹」の区分に従ってみると、「その他広葉樹」が大部分で奈良県は 49%、和歌山県は 80% をしめる。「ナラ」「ブナ」は奈良県は国有林に多く和歌山県は民有林に多い。



第 1 図 広葉樹素材生産量の年次別推移

3. 広葉樹の製材用素材入荷量および工場数の年次別推移

木材需給報告書¹⁾によると、製材工場への広葉樹素材の入荷量および工場数の年次別推移は第 2 図のとおりである。

奈良県における製材工場への入荷量の年次別推移は、昭和 43~44 年の $26 \text{千} m^3$ を最大値として、以下下降を続け、昭和 56 年には $4 \text{千} m^3$ となっている。

工場数も昭和 43 年には 30 工場であったが、昭和 56 年には 7 工場に減少している。これを 1 工場当たりの年次別入荷量の推移でみると、年によって変動があり、傾向的には昭和 38 年以降増加し、昭和 50 年には最大値の $2 \text{千} m^3$ 弱を示し、以後減少して昭和 54 年には最低を示すが、以後若干増加している。

第 3 表 国有林立木処分の樹種別数量

営 林 署 名 樹種	年度	奈 良			新 宮			田
		5 4	5 5	5 6	5 4	5 5	5 6	5 4
ブ ナ		1,381	1,033	2,703	4	1	11	
カ シ		202	41	642	1,213	1,394	1,113	1,083
ナ ラ		1,248	686	1,154	21	2	23	48
ケ ヤ キ		18	10	7	17	31	116	1
ク リ		59	10	25				
サ ク ラ		327	400	366				
ミ ズ メ		556	516	613				
ホ オ ノ キ		11	5	18				
ト チ ノ キ		133	73	162				
サ ワ ク ル ミ		46	21	50				
カ エ デ		195	193	280				
ク ス								
セ ン ノ キ		3						
シ イ								
そ の 他 L		2,839	2,411	3,201	4,674	5,981	4,974	2,067
計		7,018	5,399	9,221	5,929	7,409	6,237	3,199

注 大阪営林局利用課資料による。

また、和歌山県における製材工場への入荷量は、昭和41年には39千 m^3 あったが、以後、下降を続け、昭和56年には19千 m^3 に減少している。工場数は昭和42年には44工場あったが、昭和56年には16工場に減少している。これを1工場当たりの年次別入荷量の推移でみると、昭和38年以降増加を続け、昭和51年には最大値の2千 m^3 弱を示し、以降は減少傾向である。

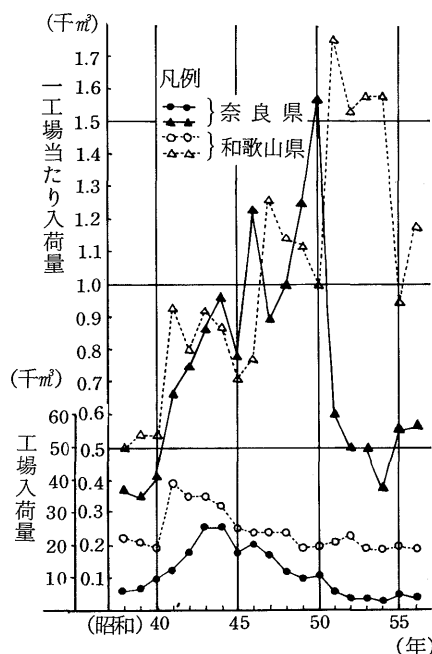
以上、概括してみると奈良・和歌山両県の地元産広葉樹林の資源並びにその生産量は年によって不規則な変動を示すが、全般的に減少傾向にあり、製材工場もこれに対応して減少していると言える。

Ⅲ 広葉樹用材の流通状況

1. 国有林材の販売流通状況

広葉樹用材の流通は、国有林材が大きな比率をしめているが、奈良・和歌山両県内の国有林における最近3ヶ年間の立木処分並びに素材販売の樹種別数量は、第3～4表のとおりである。

すなわち、立木処分量を樹種別にみると年度によって相違はあるが、「ブナ」「カシ」がもっとも



第2図 広葉樹製材用素材の工場入荷量

(単位: m^3)

辺		高			野			計		
5 5	5 6	5 4	5 5	5 6	5 4	5 5	5 6	5 4	5 5	5 6
4		597	456	676	1,982	1,494	3,390			
1,271	1,190				2,498	2,706	2,945			
122	6	163	36	85	1,480	846	1,268			
2		4		2	40	43	125			
		43	15	10	102	25	35			
188	216	43	20	16	370	608	598			
93	49	237	76	123	793	685	785			
55	9			1	11	61	27			
	3	41		20	174	73	185			
		12	4	40	58	25	90			
	1	4	12	22	199	205	303			
	1						1			
					3					
350	397					350	397			
2,362	2,484	1,340	675	976	10,920	11,429	11,635			
4,447	4,356	2,484	1,295	1,970	18,630	18,550	21,784			

第4表 国有林素材販売の樹種別数量

樹種	年度	奈 良			新 宮			田 辺
		5 4	5 5	5 6	5 4	5 5	5 6	
ブ ナ		1,229	656	584		12	13	13
カ シ		221	1					1
ナ ラ			85	14		1		2
ケ ヤ キ		14	30	4		1		6
セ ノ キ		4	1					
サ ク ラ		10	7	19				5
ミ ズ メ		187	113	67		6	2	5
ホ オ ノ キ		3						
ト チ ノ キ		343	395	215	10	7	13	
カ エ デ		30	37	20		1		5
キ ハ タ			3					
シ オ ジ			6					
低 質 材		2,456	2,851	2,399	770	1,556	2,487	98
そ の 他 L		105	135	119	50	56	138	6
計		4,602	4,320	3,441	830	1,640	2,653	141

注 大阪営林局利用課資料による。

多く「ナラ」がこれにつき、素材販売量では「ブナ」がもっとも多く、「トチノキ」がこれについている。営林署別では奈良県内の「奈良」、「高野」の営林署管内では「ブナ」、「ナラ」などが多く、和歌山県内の「新宮」、「田辺」の営林署管内では「ブナ」は少なく、「ナラ」が多い。また、素材販売では「奈良」の営林署管内は「ブナ」を中心とし、「トチノキ」「ミズメ」等が多く、他の営林署管内のこれらの販売数量は少ない。これら各営林署管内での「立木処分」による立木の購入業者並びに素材購入業者の実態は第5～6表のとおりで、チップ業者、製材業者、素材生産流通業者（これは素材生産業者から原木問屋まで、素材の生産流通を担う業者を一括した表現である）などによってそ

第5表 国有林立木処分購入業者

営林署名	年 度	製材業者 %	チップ業者 %	木 工 ・ そ の 他 %	素材生産 流通業者 %	その他業種 %	処分数量 m^3
奈 良	S. 5 4		98.8		1.2		7,018
	5 5	14.3	40.0	45.1	0.6		5,399
	5 6	6.7	84.3	8.4	0.5	0.1	9,221
新 宮	5 4		94.0		5.9	0.1	5,929
	5 5		81.5		18.5		7,409
	5 6		99.7		0.3		6,237
田 辺	5 4		84.2		15.2	0.6	3,199
	5 5		82.1			17.9	4,447
	5 6		84.2			15.8	4,356
高 野	5 4		92.1		7.9		2,484
	5 5		65.0		35.0		1,295
	5 6		99.5		0.5		1,970

注 大阪営林局利用課資料による。

(単位: m³)

辺		高 野			計		
5 5	5 6	5 4	5 5	5 6	5 4	5 5	5 6
5					1,242	673	597
					222	1	
1					2	87	14
	1				20	31	5
					4	1	
5	2	1			16	12	21
1	1				192	120	70
					3		
					353	402	228
					35	38	20
						3	
						6	
52	58				3,324	4,459	4,944
2	1	3			164	193	258
66	63	4			5,577	6,026	6,157

第6表 国有林素材販売購入業者

営林署名	年 度	製材業者 %	合板業者 %	チップ業者 %	木 工 そ の 他 %	素材生産 流通業者 %	販売数量 m ³
奈 良	S. 5 4	3.42	0.2	52.1		13.5	4,602
	5 5	25.0		40.8	1.0	33.2	4,320
	5 6	24.0		47.9	1.6	26.5	3,441
新 宮	5 4	36.6		58.6	0.5	4.3	830
	5 5	30.3		20.1		49.6	1,640
	5 6	34.7		24.5		40.8	2,653
田 辺	5 4			100.0			141
	5 5			100.0			66
	5 6	4.8		95.2			63
高 野	5 4	100.0					4
	5 5						
	5 6						

注 大阪営林局利用課資料による。

の購入がおこなわれている。

「立木処分による立木」は、ほとんど「チップ業者」によって購入されているが、「素材販売の素材」は営林署によって相違し、「田辺」は「チップ業者」がほとんどであるが、「奈良」、「新宮」では「製材業者」、「チップ業者」、「素材生産流通業者」の3者によって購入されている。

2. 民有林材の販売流通状況

国有林広葉樹用材の以上の販売状況は、量的相違はあるが民有林においても同様で、これら業者に

よって原木市売会社、付売問屋などに出荷され、または直接加工業者に売却される。民有林の場合、これら総量を数量的に捕らえることは不可能に近いが、国有林に比べてその里山性から小径木が多い関係上、「チップ業者」に売却されるものを中心としめ、このなかに含まれる用材もこの「チップ業者」による仕分けによって用材流通ルートにのるものが多いのが実態である。

以上の流通状況から、我々は奈良・和歌山両県において、チップ業者(4)、原木市売会社(2)、産地製材業者(3)、原木付売問屋(1)、計10ヶ所について、「調査表」照会による仕入れおよび販売についての

第7表 広葉樹用材の流通状況

業 種	業者名	位 置	年間取扱量 _m	仕 入	販 売
チップ業者	K	奈良県 五条市	35,000	立木のみ仕入, 国有林なし	現場で仕分け, 銘木は少量 大阪の原木市場へ 一般用材の原木は地元製材業者へ チップ材K製紙会社へ
"	O	"	17,000 ~ 18,000	会社有林35% 国有林65% (立木買付, 内6~7割パルプ材)	現場で仕分けし銘木は年840m ³ が 大阪, 岐阜の原木市場へ(ミズ メ, ナラは岐阜, シオジ, トチは 大阪), 銘木は100m ³ が売材業 者へ, ブナ丸太は地元製材業者, 地元製材業者へ, 年間総量で6 割は地元業者へ, 4割は市売り と自家消費パルプへ
"	I	和歌山県 田辺市	24,000	立木60%…国有林(田辺) 年1,500~2,000m ³ を含む 売材40%…国有林(奈良, 尾 鷲)年1,000m ³ を含む 集荷範囲, 和歌山県, 奈良県北 部, 三重県の一部	持帰り仕分けし原木20%が岐阜, 大阪の原木市場へ(岐阜に超高 級用, 大阪へは木工用が主), 製材品は大阪, 和歌山市, 奈良 県へ(パレット90%, 1,800m ³ 家具用10%, 200m ³)
"	Z	和歌山県 熊野川町	30,000	立木50%…30,000m ³ 国産広葉 樹, 4~5,000m ³ 輸入 売材50% チップ 集荷範囲, 十津川流域	ブナ, ナラ, ミズメの全量は奈 良県五条市のH製材業者等へ
原木付売 問 屋	X	和歌山県 橋本市	5,000	会社有林70%…銘木級500 m ³ , 1~3等材2,000m ³ 国有林5%…概数売りで立 木買付 原木市場25%	建築用40%…製材質曳き20% 新建材業者, 木工業者へ 木工用60% パルプ材はUパルプ業者へ
製材業者	H	奈良県 五条市	24,000	Z業者から90%, K, O業者か ら10%, 国有林一部公売 (24cm上の原木)	原木10%, 大阪の原木市場へ (3等材) 製材品…和歌山県下の家具業者 へ(ブナ, ナラ) シデ…シャトル業者へ カシ, サクラ, ミズメ, カエデ, シデ…糸巻製造業者へ, スコッ . プ柄製造業者へ

業種	業者名	位置	年間取扱量 ^{m³}	仕入	販売
製材業者	T	奈良県 五条市	600 ~ 700	チップ業者から購入 原木市場から稀に購入	製材品…木工業者、家具業者へ 枕木…岐阜の市場へ
〃	G	和歌山県 御坊市	23,000 (外材)	広葉樹は木工部門のみ、原料は 奈良県内から購入、タワシの頭 と柄の生産加工	加工品…和歌山県海南市の家内 工業のタワシ業者へ
原木市売 会社	S	和歌山県 新宮市	100 (広葉樹)	単式、せり市、組合員20名、ス ギ・ヒノキが主体、出材(広葉 樹)者120~130名、スギ・ヒ ノキと共に出材、ケヤキ、トチ ノキ、ナラ、ブナ、シオジ、サクラ	三重県内のD素材生産業者が買 付け
〃	J	大阪市 住之江区	12,500 (広葉樹)	せり市、主な売方4軒(広葉樹 材出荷量の95%)、ケヤキ(広 葉樹材の80%)、ミズメ、トチ ノキを出材、その他ブナ、サクラ 等	買方で広葉樹材を扱う者150人 そのうち大手は10軒、ツキ板業 者、製材業者等も含む ケヤキはツキ板か銘木、一部は 家具材、工芸材へ

調査を含めた聞き取り調査をおこなった。(奈良県内4ヶ所、和歌山県内6ヶ所)これらの業者の実態は第7表のとおりで、これら業種の流通の担当面を構造的に整理して述べると次のようなものである。

1) チップ業者

- (1) 山元の土場で出材を仕分けし、銘木級の材は原木市売会社へ出荷し、一般材は産地製材工場へ販売する。-----K業者、O業者
- (2) 工場土場で出材を仕分けし、このうち銘木、木工用原木は原木市売会社へ出荷し、その他は各用途別に半製品に加工した後、それぞれの製造メーカー(第3図に示すパレット、糸巻き、柄木などの加工メーカー)へ直接出荷する。-----I業者、Z業者

2) 原木付売問屋

広葉樹用材の原木を原木市売会社で購入し原木のまま、または委託製材をおこなって建築・木工業者に販売するが、この業者の場合は、一部立木を山元で購入し、仕分けしてパルプに向く材はパルプ業者に、用材になるものは原木のまま販売している。立木買付けによる用材用原木は、品質・規格によっては原木市売会社へ出荷することもある。-----X業者

3) 産地製材業者

チップ業者、素材生産業者から原木を仕入れ、仕分けして良材は原木市売会社へ出荷し、一般材は自己の製材工場で半加工して製品業者へ出荷する。-----H業者、T業者

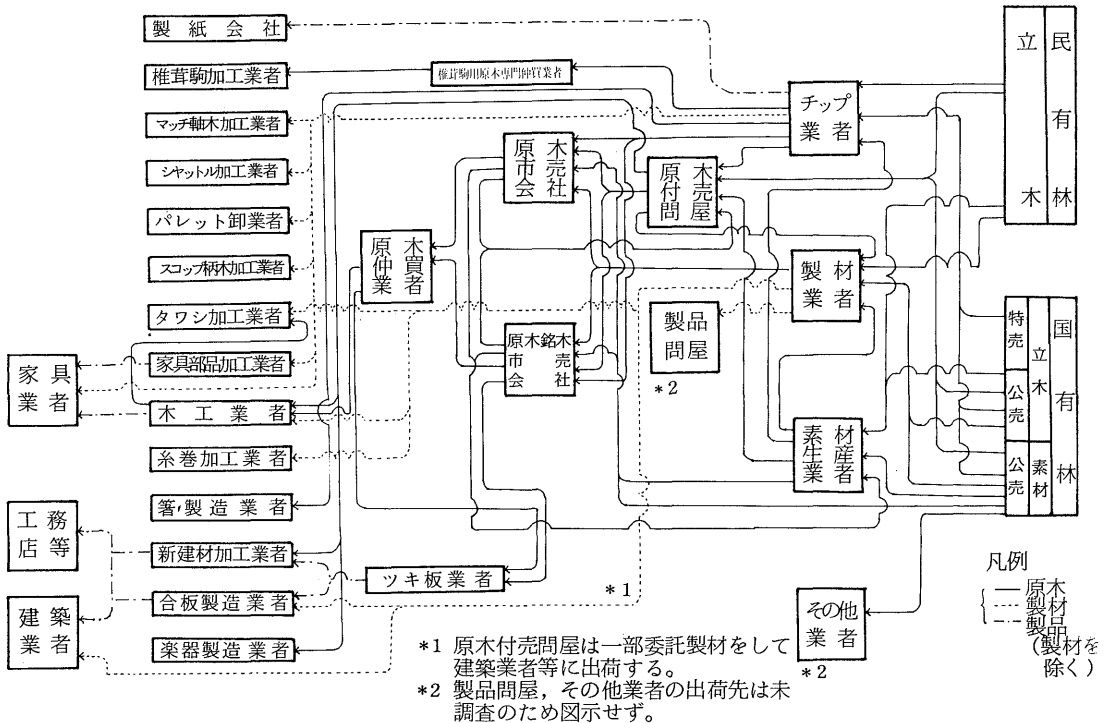
4) 原木市売会社

- (1) 一般の素材生産業者によって針葉樹材と一緒に出材された少量の広葉樹原木は、「せり」によって地元素材業者*および地元製材業者によって購入される。-----S原木市売会社
- (2) 広葉樹材専門の浜業者によって出荷され、「せり」によって仲買業者、製材業者、ツキ板業者等によって購入される。-----J原木市売会社

※ 地元素材業者は原木市売会社から購入した少量の広葉樹原木を、自己生産素材を仕分けしたものと一緒にしてチップ業者、産地製材業者に販売している。

3. 流通経路

以上の業者による流通の経路を一括して図示すれば、第3図のとおりである。



第3図 奈良・和歌山両県産広葉樹材の流通経路

この流通では、銘木級の材は銘木市売会社（岐阜K市売会社が多い）へ、建築・木工用の一般用材（1～3等材）は大阪のM付売問屋（これはさらに大阪のK市売会社へ出荷される）へ、特定樹種は直接それぞれの加工業者へ原木のまま、或いは受託製材し半加工品として出荷されるものが多い。

これら流通する用材を用途別樹種でみると、家具材では、箱物には「ナラ」、「ケヤキ」、「ミズメ」など、脚物には「ブナ」「トチノキ」などが用いられ、建築材では、敷居に「サクラ」、「ミズメ」、新建材に「ケヤキ」が用いられる。また、木工材では「シデ」は紡績用糸巻き、玉のれんなど、「トチノキ」は盆などのくり物、「サクラ」小径木はスコップの柄木など、「サワグルミ」、「ミズキ」は製箆用、広葉樹材の下級品はパレット用にそれぞれ使用される。

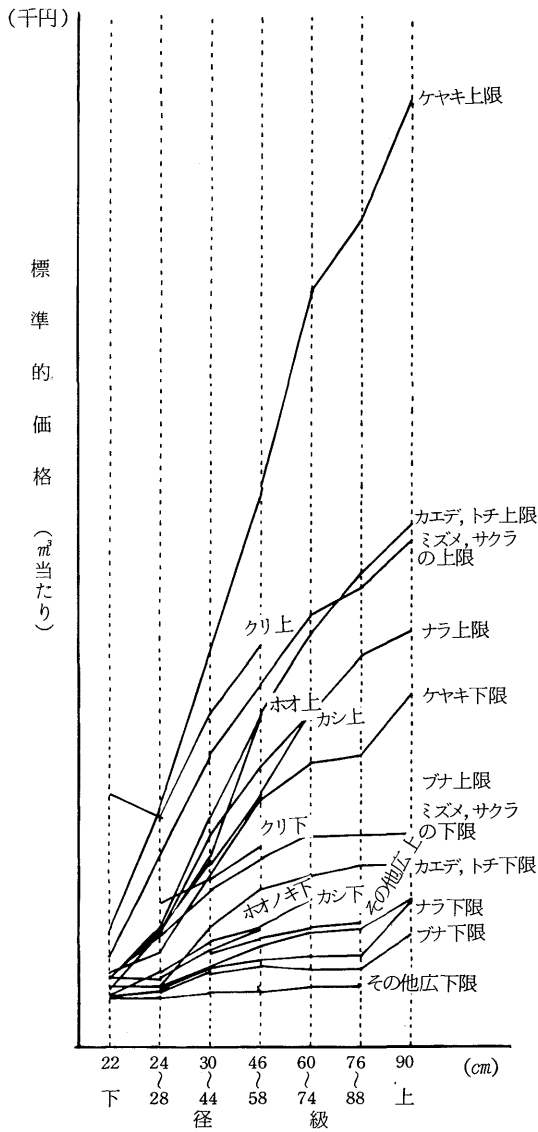
これら広葉樹用材は、その生産の性格上（拡大造林のための伐採が多い）量的にも少なく、樹種も多様である。その仕分けは伐採現場でチップ業者が第1次の仕分けをし、産地製材業者が自己土場で第2次の仕分けをするなど、集約的な仕分けがおこなわれる特徴を持っている「トラック1台分たま

るまで待つ」といった少量の場合が多いようである。

4. 広葉樹用材の価格

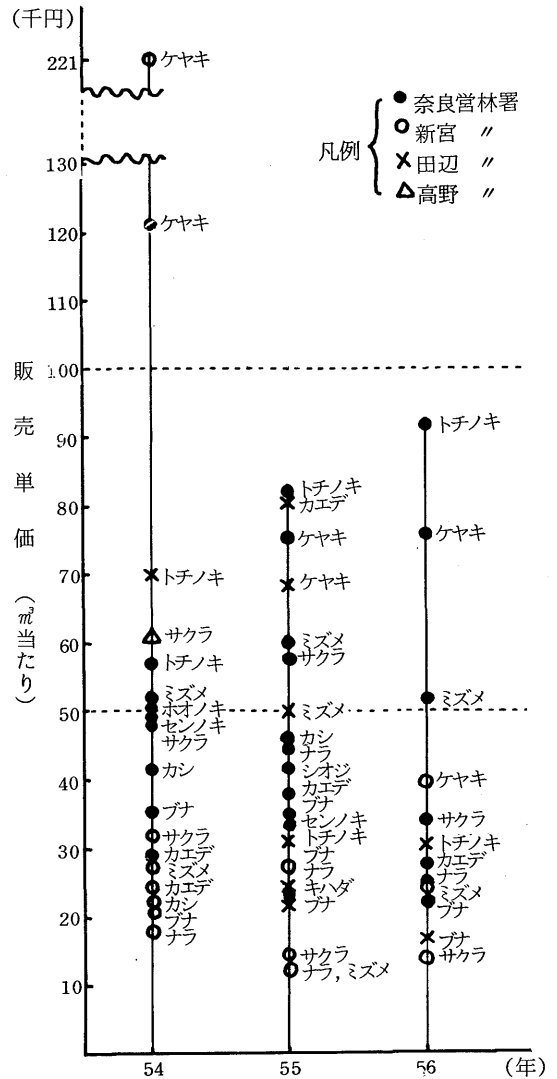
広葉樹用材の価格²⁾は、その樹種別の物理学性の相違等による用途の多様性、さらに材長、径級、品質の相違、又、年輪、木目、色あいなど微妙な材の形質の相違等によって需給が異なり、複雑な価格形成が見られる。

例えば、国有林は広葉樹用材の標準的な価格を調査しているが、その樹種別価格の上・下限は次の第4図



注 1. 上・下限は材の等級による価格の上・下限である。
2. 価格は未公表のため相対的価格のみを示した。

図4 国有林の広葉樹材樹種別上・下限別標準的価格範囲(紀伊, 紀和, 兵庫ブロック)



第5図 樹種別素材販売価格

のとおりで樹種による価格の開きが大きいと同時に、上、下限の幅も大きい。樹種別価格では「ケヤキ」がもっとも高く、「クリ」「ミズメ」「サクラ」「カエデ」「トチノキ」等がこれにつき、「ブナ」は低い。

奈良・和歌山両県内の国有林における昭和54～56年度3ケ年間の素材販売について、その樹種別素材販売実績価格（ m^3 当たり単価）をみると、第5図のとおりである。

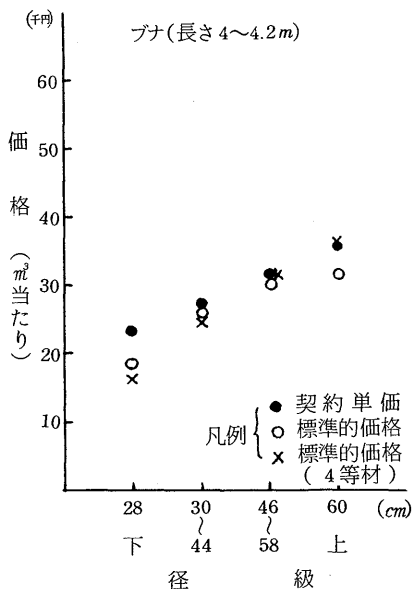
この販売単価からみると、「ケヤキ」・「トチノキ」がもっとも高く上位をしめ、次いで「ミズメ」・「サクラ」などが続き、「ブナ」などは下位に位置している。

また、Kチップ業者は原木を集材現場で仕分け、銘木級のものは原木市売会社に、チップ材はチップ業者に、一般用材は産地製材業者に販売する。その産地製材業者に販売する樹種別、規格別の契約単価（6ヶ月ごとに契約を更新、昭和56～57年度）をみると、第8表のとおりで、樹種別では「ケヤキ」・「クリ」が高価格で、「ミズメ」・「シオジ」がこれにつき、「ブナ」は低価格である。

第8表 樹種別販売契約単価の一例（昭和56～57年度）

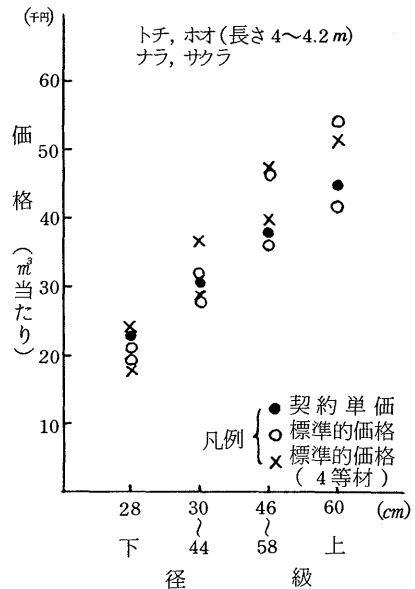
円/ m^3 当たり

樹種	材長 m	直径 cm	単価 円	樹種	材長 m	直径 cm	単価 円
ブナ (ザツ)	4.2	28下	23,000	ミズメ, シオジ	4.2	28下	27,000
		30~44	27,000			30~44	36,000
		46~58	31,000			46~58	50,000
		60上	35,000			60上	70,000
トチ, ホオ ナラ, サクラ	4.2	28下	23,000	クリ, ケヤキ	4.2	28下	35,000
		30~44	31,000			30~44	50,000
		46~58	38,000			46上	60,000
		60上	45,000			18上	25,000



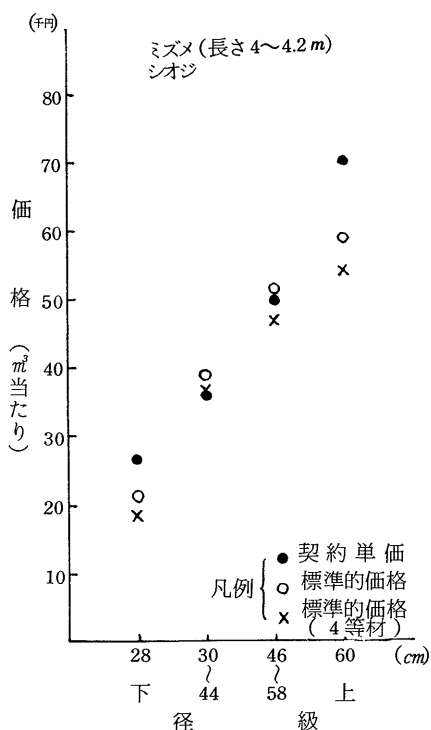
注:標準的価格の○×は地域による相違である。

第6図 契約単価と4等材標準的価格との比較



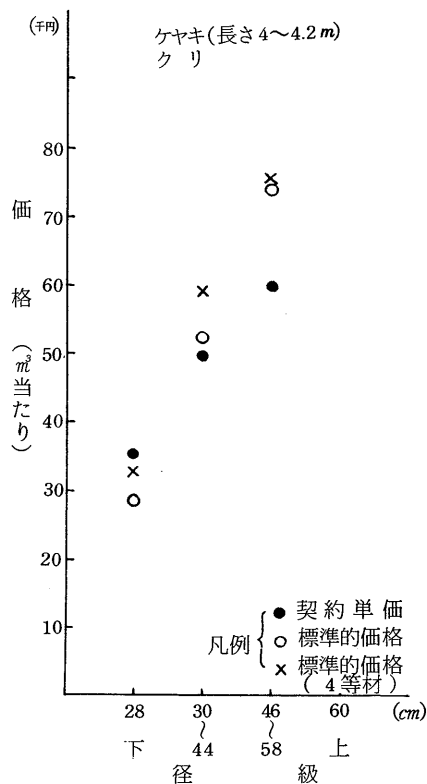
注:標準的価格の○×は地域による相違である。

第7図 契約単価と4等材標準的価格との比較



注:標準的価格の○×は地域による相違である。

第8図 契約単価と4等材標準的価格との比較



注:標準的価格の○×は地域による相違である。

第9図 契約単価と4等材標準的価格との比較

また、H業者(産地製材業者)がZ業者(チップ業者)から仕入れている原木の取引価格は、非常に大雑把で樹種別区分は行わず、径級も30cm上・下の区分である。径級30cm上を「込」でm³当たり33,000円、30cm下はm³当たり23,000円~25,000円であり、製材品販売価格は原木仕入れ価格の2倍程度になると言っている。

このチップ業者が産地製材業者へ販売するさいの契約単価を国有林の広葉樹用材の樹種別・規格別・品等別の標準的価格(紀伊・紀和地方)の4等材と比較してみると、第6~9図のとおりで大体近似している。

最後に針葉樹、広葉樹の価格を対比するため、関西木材市場の標準価格を、両者が示されている「長さ4m、直径30cm上、込」の場合でみると、「マツ!」、「スギ」、「ヒノキ」丸太がそれぞれ31,000円、41,000円、70,000円であるに対し、「カシ・ブナ」、「ミズメ」、「ケヤキ」がそれぞれ40,000円、47,000円、83,000円で、広葉樹が全般的に高価格であり、この範囲では広葉樹が希少性を持つと言える。これは特に「ケヤキ」にいちじるしい。

Ⅳ おわりに

以上の広葉樹用材の流通と価格の実態について、これを総括して述べれば次のように言える。

- 1 広葉樹用材の樹種，材質の多様性は，その用途を非常に複雑多岐にしている。
- 2 その結果，流通機構，価格形成も非常に複雑，多様なものとなっている。
- 3 ただ，それぞれの用途における需要量はそれ程大量ではなく，需要の中心である針葉樹用材の補完的性格を持つと同時に，代替性を持つ外材の輸入も行われているから，「ケヤキ」は別としてそれ程希少性を持つものとはなっていない。しかし針葉樹にくらべれば，両者の価格の開きにみるように広葉樹がより希少となっている。特に「ケヤキ」の希少性は顕著で広葉樹樹種のなかでもっとも高価格である。

引用並びに参考文献

- 1) 農林水産省統計情報部編：木材需給報告書（昭和38～56年） 農林統計協会
- 2) 菅野武美：道産優良広葉樹（銘木）の見方・考え方，営林局報「林」 1982年9月